The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Technologies of Difference Chronic Disease and the Politics of Life in Contemporary Japan |
| Author(s) | Mohacsi, Gergely |
| Citation | 大阪大学, 2018, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/69670 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（MOHÁCSI GERGELY（モハーチ ゲルゲイ）） | |
|---|---|
| 論文題名 | Technologies of Difference<br>Chronic Disease and the Politics of Life in Contemporary Japan<br><br>（差異としての技術：日本における慢性疾患と生の政治性に関する人類学的研究） |

論文内容の要旨

※　日本語の概要には裏面をご覧ください。


**Abstract (English)**

Taking diabetes, a chronic metabolic disorder, as its ethnographic ground, this thesis explores the mediation between cultural and social worlds, medical technologies and the politics of life in contemporary Japan. To do so it departs from classic notions of disease and illness in medical anthropology and practice theory (*jissen ron*) to carving out *an ethnographic theory of disease* by drawing on current ideas in, and across, science and technology studies (STS), medical and cultural anthropology and Japanese studies.

Diabetes is a major health problem in Japan affecting more than 5 million people directly. Its public health implications grow along with the potential market of newer and simpler medications and diagnostic devices making it one of the most dynamic fields of collaboration between the state, scientific research and private pharmaceutical companies. My concern in this thesis is to describe how both mundane and advanced biomedical technologies perform these links, which, in turn, articulate biological and cultural differences by measuring, negotiating and comparing them in medical practices. Combining participant observation at a diabetes center in Northern Japan, and other healthcare and research facilities, with interviews of patients, medical professionals and public health officials, along with the assessments of endocrinological literature and popular media, the dominant pluralist model of medical anthropology will be criticized and corrected.

Differences play a crucial role in contemporary medicine, and anthropologists are, by profession, attentive to the plurality of illness and its social consequences. However, as recent dialogues between science studies and anthropology have shown, such plurality is present on both sides of the divide, and anthropologists should address them symmetrically if they want to overcome both cultural and technological reductionism. Through an ethnographic engagement with the technosocial situations of diabetes care in Japan, the thesis explores two ways in which the metabolism and its disorder is acted upon: *learning* and *comparison*. Part I introduces a diabetes center where patients are treated for the prevention of diabetic complications. It deals with the emergence of mindful metabolic bodies by looking at the local sites of diabetes care where high glucose levels are embodied in an ongoing process of *learning disease*. Part II, by contrast, follows *diabetes as a comparative entanglement* between epidemiology, genetic science and public health interventions on a massive scale.

Different facts and experiences structure the knowledge about diabetes that emerges from the interferences of particular scientific and cultural attributes. The puzzle is this: how do the different subjects of clinical medicine, molecular biology and epidemiology come to stand for the same disease? Or, do they at all? The argument presented in this thesis contends that such interaction is made possible through the constant work of the metabolism. The final chapter deals with the question how biomedical technologies and innovations force us to rethink the fundamental anthropological problem of difference. Here, I propose the notion of *metabolic togetherness* as a mode to extend the ethnographic method beyond the notion of pluralism and diversity. Finally, I conclude that doing an *ethnographic theory of a metabolic disorder* is also a way of living together with the metabolism. (510 words)

## 概要（日本語）

本論文は、日本における「糖尿病」という慢性疾患の民族誌を通じて、医療技術に介される人間と非人間の多様な関係を考察することで、人類学研究における差異の問題を問い直すことを目的とする。

差異と類似の評価は、現代医療の現場で極めて重要な役割を果たしている。医療技術の選択肢をめぐる、年々増大している多様化と共に、身体を生きる患者の生活における異質性も注目の的になりつつある。こうした科学知識と文化における複数の差異を媒介するのは、身体を「公的表面」として生み出す医療のさまざまな人工物である。本論文で取り上げる糖尿病治療で使用される様々な医薬品と医療技術は、このような科学と文化の多様性を動員する人工物である。従来の人類学者はいろいろな角度から医療の多元性を描いてきた。西洋医学と異なる医療体系を記述した数多くの民族誌から、患者と医療者の種々の解釈への関心や、医学知見としての疾病と文化現象としての病いの対立まで、生物医療を囲む多様性の存在については、十分に分析されてきた。しかし差異は体系、信念、あるいは解釈だけではない。差異は実践の要素でもある。

第Ⅰ部では、病気の学習に焦点を当て、北日本のある糖尿病センターで行われる糖尿病治療の実践（第１章）を人類学の眼鏡を通してみていくことにより、薬や診断機器などの、科学と文化と身体のそれぞれのレベルにおける差異化を結びつける役割について検討する。ここでは、糖尿病治療において極めて重要な役割を果たす患者教育（第２章）とセルフケア（第３章）の事例を踏まえ、複雑化した社会における差異の技術的な媒介を示してみる。なお、医療実践の「中」で、いかに文化と自然における違いが同時に構成しあいつつあるかを明らかにした上で、多元性の人類学における主導的な論考を批判する。

第Ⅱ部では、種々の民族誌的ならびに科学的な材料をもとに、糖尿病研究と予防の三つの現場である臨床（第４章）、研究所（第５章）、患者会（第６章）で行われるさまざまな「比較実践」を描く試みを展開する。そこで生活習慣と倹約遺伝子という、糖尿病学のそれぞれ異なる標的を行き来する「代謝」（metabolism）の動きを追いかけていく。糖尿病などの慢性病を患っている多くの人々は、自覚されていない体内の働きを抱きつつ、日々の生活に不可欠な知識を習得していくなかで、さまざまな他者との距離をはかる人格を再構成していく。第４章で、働き盛りの中年男性の生活世界と血糖の検査値という一見異次元のようにみえるものの間を揺れ動く「生活習慣」の動的な性格を示す。そしてこの「生活習慣」が、生そのものを意味する倹約遺伝子の関与を得て、日本人という主体と創薬の対象の間を行き来することについては、第５章で述べる。

糖尿病そのものの民族誌から見えてくる「学習」と「比較」という二つの配置を互いに見いだす状況をここで「代謝としての共生」（metabolic togetherness）と呼び、生活と生物との相互包含関係に注目したい。最後の第７章で、こうした糖尿病研究の現場で増殖しているハイブリッドを通じて、人間と非人間の多様性が互いに関係しあい、影響しあうことに着目し、人間と科学の複雑で動的な相互干渉に取り組むポストプルーラル人類学の可能性を実験的に模索する。(1362 字)

様式７

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（　Mohacsi Gergely　） | | |
|---|---|---|
| 論文審査担当者 | （職） | 氏　名 |
| | 主 査　教 授 | 白 川　千 尋 |
| | 副 査　教 授 | 栗 本　英 世 |
| | 副 査　准教授 | 森 田　敦 郎 |
| | 副 査　特任准教授 | Casper Bruun Jensen |

## 論文審査の結果の要旨

本学位請求論文は、現代日本の医療分野で大きな問題の一つとされている糖尿病を対象とした民族誌的研究である。また、糖尿病という慢性疾患をめぐる患者を中心とした当事者たちの経験のあり方を民族誌的に明らかにすることを通じて、人類学が依拠してきた差異を重視する相対主義的視点に内在する問題や陥穽を問い直し、乗り越えようとするきわめて挑戦的な理論的研究でもある。

本論文は序章と二つの部からなる。第Ｉ部（第１～３章）は、札幌の糖尿病専門医療施設における約８カ月間の人類学的フィールドワークによって得られた民族誌的知見に基づく。Learning Diseaseと題された第Ｉ部では主に患者による糖尿病の学習プロセスに焦点が当てられ、患者教育や患者自身によるセルフケアなどの場において、患者が医療機器や薬剤などの非人間的ファクターを介してどのように糖尿病を経験しているかが詳細に描き出されている。一方、第Ⅱ部（第４～７章）は、主に東京の患者による啓発団体を対象とした約18カ月に及ぶフィールドワークに基づく。また第５章では、研究機関でのより短期的な調査に依拠しつつ、患者の日常生活に関わる新薬開発や予防医学的研究といったマクロな社会的動向にも目が向けられている。同章を含むComparing Diseaseと銘打たれた第Ⅱ部では、糖尿病が当事者たちにリアリティをともなったものとして経験される際に、人間および非人間的ファクターを介した多様な比較の実践がきわめて重要な役割を果たしていることが鮮やかに浮き彫りにされている。

多岐にわたる本論文の意義のなかでもとりわけ重要なものの一つは、病気をめぐる当事者の経験を当事者とその語り、すなわち人間の世界のみに着目して明らかにしてきた従来の医療人類学的研究とは異なり、科学の人類学や科学技術社会論などの最新の理論的枠組みを批判的に援用しつつ、そうした経験が人間とモノやテクノロジーといった非人間的ファクターとが織り成す多様な関係に基づいて構成されていることを実証的に明らかにした点である。この点で本論文は、糖尿病をはじめとした慢性疾患の人類学的研究に新たな地平を切り拓くものと位置づけることができる。のみならず、本論文で対象とされている糖尿病のような症状が顕在化しないそのほかの多くの病気、さらには直接的に知覚することの難しい病気以外のさまざまな現象やものごとが、当事者や関係者にある種のリアリティをともなったものとして経験されるプロセスやメカニズムを掘り下げて理解しようとする際にも、大いに参考になるものと言える。この点で本論文は、糖尿病や慢性疾患の医療人類学的研究という限定的な領域にとどまらず、人類学全般、ひいては科学技術社会論などの隣接分野にも理論的示唆を与えるような潜在力をもつ研究として高い評価に値する。

また、本論文は、医療人類学が主な対象としてきた差異性に裏打ちされた病気をめぐる当事者の認識や実践と、生物医学が対象としてきた共通性に裏打ちされた生物医学的認識・実践が、従来の医療人類学的研究で指摘されてきたように乖離しているだけでなく、結びついている有り様を当事者の視点から明らかにすることに見事に成功している。そして、それを踏まえて差異性と共通性の結びつきに関する理論的考察が展開されているが、そこでは人類学が依拠してきた相対主義的視点の抱える問題や陥穽を乗り越えるための方途が、人類学に不可欠な民族誌という手法に基づいて抽象論に陥ることなく具体的に検討されている。国内外の人類学界では近年、人類学の基底にあった理論的・方法論的枠組みを問い直すことで、学としてのあり方を根本から刷新しようとする「存在論的転回」とも称される動向が注目を集めているが、本論文は人類学はもとより隣接分野にも及ぶこうした学的動向のさらなる展開に資する可能性を秘めた、きわめて広い射程をもつ優れた研究と評価できる。

以上から、本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分に価値あるものと判断された。